

「死んでから往くところが違うこと」の臨床心理学的一考察

—妻との死別について語る男性高齢者のライフレビューにみる信仰の意味—

林 智 一

(香川大学医学部)

目的

Butler(1963)は、終末期の患者や高齢者など、死を意識した人々にみられる生育史の回顧にセラピューティックな意義を見出し、それをライフレビューと呼んだ。筆者は、心理的に健康な高齢者を対象として、回数を制限したライフレビューを研究的に実施し、そこに見られた主要テーマや展開プロセスなどについて検討してきた(林, 2012; 2016; 2018 など)。

その中では、信仰に関するテーマが語られる事例が散見された。なお、高齢者が宗教に対して高い関心を有していることは、これまでも指摘されている(Markides, 1987)。

本研究では、亡妻と信仰する宗教が異なるため、喪の仕事(Freud, 1917)の遷延が見られた男性高齢者のライフレビューを提示し、その信仰の意味について検討することを目的とした。なお、あくまで本事例の語り手に関する一考察であり、高齢者全般の信仰やその是非を論じるものではない。

方法

某介護老人保健施設の協力の下、うつ病や認知症の診断がなく、ある程度の言語化能力や疎通性を有したデイケア利用者をリストアップしてもらった。筆者より研究趣旨を口頭と文書で説明し、同意の得られた高齢者を研究協力者とした。臨床心理士である筆者が聴き手として、週 1 回 50 分のライフレビューを 10 回にわたり実施した。質問項目は設定せず、＜思い出の話を聴かせてください＞ということばで導入し、自発的回顧が見られた際、聴き手である筆者が積極的関心を示すことで回顧を促進・援助するという方法を取った。

結果

1. 語り手と生育史の概要

80 歳代前半の男性、A さん。自営業の両親のもとに生まれたが、12 歳の時に母が死去。中学卒業後、技術を必要とするサービス業（亡母と同じ職業）についた。16 歳で父も死去。30 歳頃、見合い結婚したが離婚、40 歳頃、再婚して子どもをもうけた。しかし数年前に妻が病死し、娘夫婦と同居のため現居住地に転居してきた。

2. ライフレビューの経過

最初から自発的回顧が進展し、子ども時代や仕事の話が詳細に語られた。#6 より亡妻の話題が頻出するようになる。「妻は美人。心が綺麗で人を疑わず、だまされることもあった」という。#8、亡妻は、某宗教の信者だったが、結婚して A さんの家の宗教に改宗したという。しかし、「妻は天国に行くでしょう。でも、もう会えない」と語る。筆者が理由を問うと、「宗教によって往くところが違うから」と述べた。#10 では、妻が亡くなって「目の前が真っ暗」になり、今でも辛いという。「妻が亡くなって意欲がなくなった。夢でも見るんじゃないかと思う」と語り、面接を終えた。

考察

1. 亡妻の喪の仕事の遷延

ライフレビューの前半では、主に職業を通じた自己の有能感や達成感の確認が見られた。そして後半、亡妻の喪の仕事がメインテーマとなった。死後、数年を経ても、いまだ遷延されたままの、解決途上の問題であったが、聴き手との信頼関係を構築し、面接が安全な場になって初めて語れた話題でもあると言えよう。未解決の課題であればこそ、解決を求めて自発的に語られたと考えられる。ただし研究であるため、いたずらに問題を引き出さず、安全に収束させることも肝要であった。

2. 「往くところが違う」こと—信仰の功罪—

A さんは、亡妻は宗教が違うと認識しており、そのため二度と会えないと感じていたことも、喪の仕事の遷延の一因であっただろう。同一の宗教であれば“死後の再会”などのテーマもありえたかもしれない。一方、「往くところが違う」という考えは、A さんに抑うつを招くものの、後追い自殺の抑止にもつながっていたと推察される。

一神教の欧米などに比して、多神教かつ自然宗教的なわが国では、明確な信仰を意識する人は少ないだろう。明確な信仰の自覚にはメリットとデメリットがあり、両面的に思われた。

【科研費基盤研究(C)17K04424『高齢者のライフレビューが生起するとき—奏功機序の解明と技法論の構築に向けて—』(研究代表: 林 智 一) による】